

---

# 神内と夜魔田の仕事

1 1 0 4

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

神内と夜魔田の仕事

### 【Nコード】

N4909C

### 【作者名】

1104

### 【あらすじ】

神様は自分に仕える人間の魂を天国に連れて行きたい。一方、悪魔は自分の玩具となる魂を地獄に連れて行きたい。善い人間は天国へ、悪い人間は地獄へ。連れて行くのは下っ端天使の神内と下っ端悪魔の夜魔田の仕事。

## プロローグ

待つのも仕事。重々承知している。

しかし限度というものがある。仕事が来るまで、当然だが私には利益がない。にもかかわらず、ノルマはある。よって、待つてばかりでもいられず、こちらから積極的に動く必要がある。

今、私の視界には一人の若い男が映っている。男は帽子を目深に被って、いつから着っぱなしなのか、よれたシャツにズボン。うつむき加減で住宅街を歩いているその姿は、すれ違う人を遠ざからせた。

怪しい人間には近づいてはいけない。危機を回避するためのその思考は正しかった。男はシャツの中に刃物を隠していた。

希望を失えば、代わりに得るものは絶望。男はこれからどこへ行くのか、強盗でもするのか、隠している刃物で誰かを殺めるのか。

……良いお客だ。かなりの上物だ。うれしくて笑みがこぼれる。

さてと、それでは男が罪を犯して刑務所に入る前に、仕事に入るとしようか。

私の仕事は玩具作り。とても手間の要る仕事だ。

## 1話 願い

善い人間がいれば、悪い人間もいる。同じように神様にも善し悪しがある。人間は悪い神様のことを悪魔と呼んで忌み嫌うが、当の悪魔と呼ばれた神様にとつては取るに足らぬことだった。人間が自分をどう呼ぼうが知ったことではない。人間は玩具に過ぎない。悪魔と呼ばなければ好きなだけ呼べばいい。

人間を尊いと思ってくれるのは人間だけだ。

残念なことに、この考えは神様にも当てはまるものだった。神様は人間を玩具にするようなことはしないが、苦しんでいる人間に手を差し伸べてくれることもない。

だからこそ人間から奇跡という言葉が生み出された。これは神様が人間を見てないために生まれた言葉。数少ない奇跡の裏では、数知れない犠牲が生まれている。奇跡は偶然の積み重ねの産物に過ぎない。

神様と悪魔の頭の中を占めているもの。それは、些細なことからお互いが争わないようにしなければいけないということ。人間の扱いはについて揉めて、神様と悪魔で争うなどもつてのほかだった。

奇跡に神様は関与しない。

人間に神様は関与しない。

ただ、人間の中身には関与する。

「さてと、仕事をしようか」

そう言って、黒のスーツを着た一見サラリーマン風の中年の男が、少し先を歩いている帽子を目深に被った若い男に近づいて行った。

サラリーマン風の男の名前は夜魔田、本名ではなく悪魔が人間を相手にする時のための偽名。

「あ、ちょっとお時間よろしいですか？」

夜魔田は丁寧な言葉で若い男を呼び止めると同時に、無視されな

いように前に立ち塞がった。

男は足を止めると、夜魔田を睨みつけて、シャツの中に手を伸ばした。

「駄目ですよ、こんな所でそんな物騒な物を出そうとしては」

夜魔田は辺りを見回した。主婦や子供がまばらに歩いている昼過ぎの住宅街。ここで刃物をちらつかせれば、すぐに警察を呼ばれるのは間違いない。

男は今からコンビニで強盗をするつもりだった。男には夢があったが、その夢が叶わないと悟った。いや、悟ったというよりも叶わないと思ひ込み、夢を捨てた。その結果、自暴自棄になって部屋に閉じこもっているうちに生活していくための金が尽きた。

このままでは死んでしまう。嫌だ。死ぬのは。そう思った男は最終的に刃物を握った。実に短絡的で身勝手だが、それが男の性格だった。

「……お前、どうして？」

男は眉を寄せた。なぜ、夜魔田がシャツの中に隠している刃物に気づいたのか謎だった。

「不思議ですか？ でもね、私には分かるんですよ」

夜魔田は刃物を持っている男に対して怖がる様子はない。

「何で俺に近づいてきた？ ……警察に連れて行く気か？」

男の声は震えていた。少し冷静さを取り戻すと、警察に捕まるということが怖くなってきた。が、今から自分が犯そうとしている罪に対しての恐れはない。それだけではない、反省も後悔もない。男の頭にあるのは自分のことだけだった。

「警察に突き出したりはしませんよ。あ、申し遅れました。私、夜魔田と言います。よろしければあなたのお名前を教えてくださいませんか？」

「……」

男は何も返さない。じつと夜魔田を睨んでいる。

「教えてくれませんか、それでは仕方ないですね。少し探らせても

「らいますよ」

夜魔田は男の目を見据えた。

「な、おい、何のつもりだ？」

とっさに目をそらすようにするが、夜魔田の眼力がそれを許さない。目を合わせたまま数秒が過ぎた。

「はい、分かりました。あなたは高橋さんですね」

高橋と言われた男は驚いた。当たっている。

「さてと、私はあなたがシャツの中に隠し持っている物も知っていましたが、たった今、あなたの名前も当てました。マジックではないのでタネも仕掛けもありません。では、どうしてそんなことが出来たのか、それは私が人間ではないからです」

いきなり何を言い出すんだ？ 高橋は困惑した。

「信じていませんね。なら、信じてないついでにもう一つ、あなたの願いを一つだけ何でも叶えてあげます、と言ったら、あなたはどうします？」

「……言ってることがさっぱり分からない」

「願いを一つ叶えてあげると言ってるんです」

「ちょっと頭がおかしいんじゃないのか。そんなこと、無理に決まっている」

「と言うことは、無理でなければ叶えてもらうのですか？」

夜魔田は高橋に詰め寄ってくる。高橋の口から明確な回答が欲しかった。

「ふんっ……叶えることが出来るものならな」

「分かりました。では、あなたの願いを叶えます。あなたの望みはさつき名前を探った時に一緒に調べさせていただきました」

さてと、後はもう一押しだ。一呼吸置いて夜魔田は言葉を続けた。「ただですね、願いを叶えると、あなたは人間でなくなってしまう」

「人間でなくなる？」

「はい、姿形は今と同じ人間のままです。それにもしあなたが結婚

して子供を授かれれば、その子供も人間です。しかし、誰にも気づかれることはありませんが、あなた自身は人間ではありません。これはあなたの願いを叶える代わりの交換条件です」

人間でなくなる。そうだとしても、夜魔田には高橋がこの話に乗ってくる自信があつた。高橋は夢を捨て、将来に絶望していた。

絶望した人間、そして心に闇を持つ人間は、ほぼ確実に願いを叶えてやるという誘惑には乗ってくる。それで失う物の大きさは考えない。

「分かつた。もし俺の願いが本当に叶うのなら、人間でなくなつても構わない」

案の定、だ。夜魔田は内心ほくそ笑んだ。

信じる、信じないを置いて、一気に話を進めたのも良かった。話の信憑性に重みを持たせなかつたので、深く考えずに簡単に承諾した。高橋は半ば嘘だと思つていて、もし本当に願いが叶えば儲けものとしたか考えていないのだろう。

それならそれで構わない。高橋が同意さえすれば問題ないのだから。

「それじゃ、今日はこのまま帰ってください。一晩寝て明日の朝起きた時には、今日までとは違うあなたになっています」

そう告げると、夜魔田は去って行った。

種は蒔いた。後は芽吹くのを待つ。

## 2話 玩具

高橋が夜魔田と会ってから数年が経過した。高橋は世界でも名を知られた画家になっていた。一度、自分には才能がないと諦めた夢。それが夜魔田と会った翌日から何もかも変わった。皆が高橋の描いた画に目を奪われた。

高橋自身は以前と比べて、自分の画にどういった変化が出来たのか分からない。今までと自分の画力は変わってないように思えた。

しかし、描いた画が高値で売れて、欲しい物は好きなだけ手に入るようになっていくうちに、そんなことはどうでもよくなってきた。夢を諦めて自暴自棄になっていた当時、そんな高橋をそれでも好きだと言ってくれた彼女を捨てて、画家としての確固たる地位と権力、金に引き寄せられてきた美しい女性と結婚して、高橋は満足だった。

すでに死ぬまで豪遊出来る金を高橋は稼いでいる。死ぬまでに使いきれぬだろうか、それが一番の悩みだった。

ところがそんなある日、高橋に異変が起きた。体の調子がおかしい。妙にだるい。高橋は病院に行ったが、原因は解明出来ない。

毎日少しずつ、体が重くなってくる。一体どうしたことだと、自宅のベッドで一人横たわって考える。美人の妻はこんな時でも、どこかで遊び呆けている。

水が飲みたい。しかし、動くのが辛い。

その時、誰かがドアを開けて部屋に入ってきた。妻が帰ってきたのかと顔を向ける。が、そこにいたのは数年前とまったく同じ姿、黒のスーツを来た夜魔田だった。

「お前は……」

「お久しぶりですね。迎えに来ましたよ」

「迎えに？」

「はい、もうすぐあなたは死にますから、私が地獄までの道先案内

を務めさせていただきます」

「俺が……死ぬ？　もしかしてこれはお前の仕業か！」  
目をむいて怒りをあらわにする高橋。

「私の仕業には違いありませんが、しかし、あなたは自分で選んだはずですよ。人間でなくなっても構わない、と。人間でないあなたが人間の病院に行っても、あなたがどうして苦しんでいるのか分かるわけがない。だから、私が教えてあげます。あなたの寿命はもうすぐ尽きます」

「この野郎！」  
怒りに任せて飛び掛ろうとするが、体が重くて言うことを聞かない。

「落ち着いてくださいよ。ただ、人間より平均寿命が短い、人間でない生物にあなたはなっただけのことです。それに、それなりにこの数年、楽しんだでしょ。私と会わなければ、たぶん刑務所で過ごしていたのだから感謝してください」

確かに夜魔田の言うとおりだった。夜魔田と出会わなければ、高橋はあのまま強盗に走っていただろう。そうなれば刑務所行きは間違いない。だからと言って、それを高橋が納得するわけではないが。

「……何の恨みがあつて、俺にこんな事を？」  
「恨みはないですよ。ただね、地獄に人間の魂という玩具を持って行くのが私の仕事なんですけど、昔に比べて、みんな長生きするでしょう。だから、ね、もう少しさっさと死んでもらわないと、ノルマに追いつかないですよ」

夜魔田は、人間から見れば悪魔という存在だった。悪魔は悪い人間の魂を地獄に連れて行く。そこで魂は玩具として扱われる。

「私は下っ端ですから、ひたすら玩具を地獄に連れて行くだけで、玩具で遊ぶことは出来ないですよ。ああ、早くもつと上の役職につきたいものです。それにはまだまだ数多くの魂を地獄に連れて行く必要があるんですけどね」

自分の身分の低さに夜魔田はため息をついた。それなら、どんどん

ん人間を殺して、魂を地獄に連れて行けばと思うが、そこは色々と難しい問題があった。

まず、地獄へ連れて行けるのは悪人でなければならぬ。善人の魂は天国に連れて行かれる。そこで神様に仕える。仕えるというのは神様の身の回りの世話をすること。死んだ後も働かされるのは天国ではないと思うかもしれないが、そこは地獄から見れば天国と言う解釈。

では悪人だけをどんどん殺して、地獄に連れて行けばと思うが、それは神様が納得しない。

例えば凶悪な殺人鬼が長生きすればするほど、善人を殺害する機会も増える。とすると、神様に仕える魂も必然的に多く天国に送られてくることになる。なので、神様からすれば、悪人を減らされると困る。悪魔も神様と争ってまで、悪人を殺していくわけにもいかない。争えばお互いただではすまない。

ならば、悪魔が悪人を殺したら、神様も善人を殺せば、それならお互い魂には困らない。それは、到底無理な話だった。好き勝手に魂を乱獲すれば、人間の数そのものが少なくなってしまう。そうすると、今は良くて、後々、人間がいなくなってしまうことになる。

あくまでも自然な状態を維持するのが好ましい。それが神さまの出した結論だった。

ところが、悪魔は人間の魂を玩具にするため、壊してしまう場合が多々ある。よって、魂の消費は激しい。自然に任せていては、魂の数がどうしても足りなくなる。そのため、無理やり命を奪うことはいないが、夜魔田の様に上手くそのかして寿命を縮めたりといった、ぎりぎり神様から苦情が来ないグレーゾーンなやり方になる。「けっこう私も大変なんですよ」

しみじみと夜魔田は言った。  
「さてと、それじゃ死ぬまでもう少し時間がかかりそうだから、ここで待たせてもらいますね」

夜魔田は部屋のソファに腰掛けた。同時に部屋の外から高橋の妻

の聲が聞こえてきた。

「あなたあ、体は大丈夫う？」

その言葉に心はこもってない。それも当然だった。高橋が死ねば、遺産が手に入るのだから。むしろさっさと死んでくれと思っていた。高橋もそのことには気づいていた。

妻の声を聞いて、高橋は笑みを浮かべた。

良いことを思いついた。

### 3話 高橋

「どこ行くんです？ 逃げても無駄ですよ。もう、動くのも辛いんでしょう」

と、夜魔田が声をかけた。高橋は重い体を引きずりながら部屋の外へ向かう。歩くだけでよほど苦しいのか、額に汗が滲んでいる。

「……逃げたりはしない。少し待ってる」

それだけ言うと、高橋は部屋の外に出た。どう足掻いたところで死ぬのだからと、夜魔田は追いかけてはせずに、言うとおりの部屋で待った。

「きゃああああ！」

突然、夜魔田の耳に女性の悲鳴が聞こえてきた。それから少し時間を置いて、高橋が部屋に戻ってきた。高橋の体は血に塗れている。

「妻の沙希を……殺してきた」

「なぜ？」

「お前は魂が欲しいんだろ。なら、妻の魂を持って行け。その代わりに、俺は助ける」

死にたくない。高橋はそのことだけに執着している。そこから生まれる犠牲など取るに足らないことだった。

「悪人の魂でないと地獄には連れて行けませんよ」

「ふん、問題ない。この女は俺の画家としての名声と金に引き寄せられてきたくずだ」

「自分の奥さんをくずすよわばりですか。ま、確かにあなたの奥さんは、地獄行きですけどね」

高橋の呼吸は荒い。もう、長くはない。

「おい、早くしろ。どうしようもなく苦しいんだ」

「そうですねえ。でも、もし私があなを見捨てたら、二つの魂を私は手に入れることが出来るんですよね。そちらのほうが得ですね」

「お前……頼む、助けてくれ。私はまだ死にたくない」

高橋は夜魔田の体にすがりつこうとしてくる

「ちよつと、ちよつと、くつつかないください。スーツが汚れるじゃないですか」

さつと、夜魔田は体をかわした。だが、高橋は死にたくないのか、苦しいのか、その両方が、涙を流しながら追いつがつてくる。

「何をしてるんですか、あなた方は」

そう言つて、一人の男が部屋に入ってきた。男は夜魔田の黒のスーツとは違って、白のスーツを着ている。

「ああ、これはこれは神内さんじゃないですか。」

夜魔田は軽く頭を下げた。神内は天国に魂を連れて行く天使だった。

「今日はどうしたんですか？」

夜魔田が尋ねた。

「あなたと同じ、仕事ですよ。魂を受け取りにね」

「魂、誰の？」

高橋も、高橋の妻である沙希も地獄行きの魂だ。

神内は高橋を見た。

「この方の奥さんのお腹の中の子をね。天国まで連れて行くんですよ」

よく見れば、神内の右手には胎児の姿をした魂が握られている。

これには夜魔田も驚いて高橋を見る。

「あなた……お腹に子供がいたのに、自分の奥さんを殺したんですか？」

「だからどうした？ 俺が死ぬよりましだ」

後悔など微塵もなくそう言い放つ。

夜魔田は微笑した。

自分は人間から悪魔と呼ばれる存在だが、この男こそ悪魔そのものだ。悪魔という言葉自体、人間が作り出したもの。モデルは人間と言つことか……

「何がおかしい。そんなことはどうでもいいんだ。私を助けてくれ。」

助けてくれさえすれば、俺が何人でも殺してやる！ 地獄行き間違いない悪人をな」

高橋は叫ぶように言う。それを聞いた神内は眉をひそめた。

「夜魔田さん、あまり自然な状態からかけ離れて人間を殺せば、罰せられますよ」

「ああ、大丈夫です。そこは理解しています。高橋さん、落ち着いて。分かりました。あなたは助けましょう。面白いものを見せてもらいましたし」

その言葉に、再び神内が眉をひそめた。

「面白いもの？ お腹の中の子が死んだのが？ あのねえ、胎児の魂と言うのはまだ育ってなくて、とても神様に仕えるような仕事は出来ないんですよ。だから、天国に連れて行くだけ無駄なんです。それでも回収してきたのは、天国で別の器に入れ替えて転生させる作業をする必要があるから。これ、ノルマとは関係ないからポラントイアのようなものです。分かってます、夜魔田さん？ あなたのせいで私、無駄な仕事が増えたんですよ」

神内はまくし立てた。夜魔田は両手を前に突き出してなだめる。

この世に生まれずにして死んだ哀れな胎児のことは誰も気に掛けない。

「ええ、それは申し訳ないと思っています。だから私も欲張らずに一つの魂で我慢しますから。ね、だからまあ、ここは穏便に」

神内はため息をついた。

「ああ、もう私は行きます。早くこれを片付けないと」

「どうも、ごくろうさまです」

申し訳なさそうに頭を下げる夜魔田を神内は一睨みすると、部屋から出て行った。

「ふう、それでは私も退散しますか。それにしても、高橋さん、あなたはどうしてそこまでして生きたいんですか？ 長生きしたところで地獄行きは決定ですよ」

「自分の思い通りになってまだ数年だ。こんなところで死ぬるか」

「生きても、あなた自分の奥さんを殺した以上、刑務所暮らしでしょう。これからは思い通りには生きていけないと思いますけど」

刑務所暮らしと言われて、高橋は鼻で笑った。

「そこは、考えてある。俺は原因不明の病気で悩み、沙希を殺した時は心身喪失状態だったということにすれば良い。俺は加害者じゃない。被害者の一人だ。……俺はね、心を病んだ病人になるんだよ」

「……そう上手く行きますかね？」

「俺は高名な芸術家だ。俺の画を買った奴らの中には大勢の権力者がいる。簡単なことさ。」

……この男には悪魔と言つ言葉も生温いか……

神内と夜魔田の仕事

3話 高橋（後書き）

これで1部は終了。2部は神内が主役。

#### 4話 天国と地獄（前編）

天国と地獄の境目にある場所。全ての魂はまずここを通過して、天国、または地獄に向かう。この場所は魂を運ぶ下つ端の神様と悪魔の待機場所でもあった。それぞれ管轄区域が定められており、自分の管轄区域で人が死ぬと、ここから魂の回収に向かう。

神内と夜魔田は同じ区域で、善人が死ねば神内が、悪人が死ねば夜魔田が出勤するということになる。

待機場所はオープンカフェのようになっており、神内は水を飲んで休憩していた。その姿は人間のサラリーマンが仕事の合間に休んでいる姿と変わらない。基本的に神様と人間の生活は、そんなに大差ない。人間の世界で権力者が強いように、神様と悪魔の世界でも権力を持つ者がやはり強く、神内や夜魔田はそういった者たちのために、毎日、魂を運んでいた。

「やれやれ、慣れないことはするものじゃないですね」

神内は呟いた。余計な事をしたせいで、夜魔田に魂を献上することになってしまった。今、山田は揚々と魂の回収に向かっていることだろう。

夜魔田がグレイゾーンぎりぎりのところで魂を稼いでいるのを見て、自分も、と思って、欲を出したのがいけなかった。神内はある計画を立てたが、結局、夜魔田が得をするという結果になってしまった。

「……仮にも天国に魂を連れて行く天使が、夜魔田さんと同じことをしようとしたのが、そもそもの間違いでしたか」

神様と悪魔の決定的な違いは秩序にある。神様は秩序を重んじるので魂を自分に仕えさせて道具のように扱っても、無駄に壊してはならないと決まりがある。反面、悪魔は感情のままに動き、魂を玩具として扱い、結果、壊してしまう。

魂は長い時間をかければ、言い換えれば神様と悪魔が、その魂に

飽きて用済みになれば、また人間という器に入れられて転生出来る機会を得るが、壊れてしまった魂は完全に消滅する。

これは神様の決めた秩序であり善悪。人間のそれとは関係ない。

……まあ、天国は魂が足りなくなるといふことはないのですが、持ってきた魂の数が出世に直結するのは地獄と同じですから。天国に家を建てて、雑用は魂に任せて、自分は一日中寝転がって生活出来るのはいつの日になるのでしょうかね。

そんなことを考えると、つい、ため息をついてしまう。

「どうしました？　ため息なんかついて」

横から聞き覚えのある声が聞こえてきた。そちらに顔を向けると、夜魔田が立っている。後ろには回収してきた魂もいる。

「ああ、夜魔田さんですか」

半ばどうでも良いといった感じで神内が返した。

「随分、素気ないですね。同じ区域で働いている者同士、仲良くしましょうよ」

上機嫌の夜魔田は、神内の飲んでいたコップを勝手に取ると飲み干した。

「……」

神内は夜魔田には何も言わずに、後ろにいる魂に声を掛けた。

「結局、死にましたね」

そう言われたのは、高橋の魂だった。高橋は独り言のようにぶつぶつ言っている。

「高橋さん、死んだのがよほどショックだったようで、本当に心を病んでしまいましたようです。せっかく、奥さんと子供を殺してまで生き延びようとしたのに、無駄でしたね。あはは」

夜魔田は笑った。

「随分と機嫌が宜しいようで」

「それは、まあ、棚からぼた餅みたいなものですから。お膳立てをしてくれた神内さんには感謝していますよ」

「感謝されても、私にはこれっぽっちも利益がないんですよ……全く本当に。それにしても、その魂、地獄に連れて行ったところで使い物になるんですか。独り言ばかりで、こちらの言うことを理解出来そうにないですけど」

「それは、地獄では大して問題じゃないですよ。道具ではなく玩具なので。こちらが一方的に遊んで、壊れたら新しい玩具で遊ぶだけですから」

「……なるほど」

正直、神内はうらやましいと思った。天国ではこんな状態の魂を連れて行けば、使い物にならないと叱責されてしまう。

もっとも、地獄は地獄でノルマがあるので、きついことは神内も夜魔田も変わりはないが。

……早く、楽が出来る身分になりたい。

二人は同時に同じ事を思った。

5話 自殺（前書き）

4話 天国と地獄（前編）の（後編）はもう少し後で。

## 5話 自殺

……死のうと思う。

水崎は一步前に出た。

……僕は死なないといけないから。

下を見ると、はるか遠くに地面がある。

……死んで償う。逃げたことを。守れなかったことを。

もう一步前に出る。もうそこに地面はない。

体が重力に従って落ちていく。水崎は目を瞑っている。次に目を

開いたとき、そこが天国であることを願って。

いや、僕のような人間は地獄行きかな？ ……まあ、そっちの方

が楽かもしれない。

そう思った直後、何もかも真っ暗になった。

水崎は刑務所から出所したばかりだった。罪を償って出てきたわけではなく、冤罪が証明されたから出てくる事が出来た。

水崎は、自分の彼女を殺した罪を負わされていた。しかし、水崎の家族と弁護士の努力によって無実が証明された。

ところが皮肉なことに、それは間違いだった。自由になった水崎はデパートの屋上に向かい、そこから飛び降りた。

刑務所にいる間は皆が自分を責めていると思った。そのため、生きていくことが出来た。ところが出所したとたん、水崎は悲劇の人として扱われた。

だれか自分を責めてくれ、と願う。優しくされては生きていけない。

彼女が殺された当日、実は、水崎はそれを目撃していた。視界が不自由な夜道で彼女は殺されようとしていた。

突然のことに水崎の取った行動は、彼女を置いて逃げることだっ

た。いや、水崎はその時、殺されているのが彼女だとは知らなかった。夜だったことと、殺人犯の後ろ姿が邪魔して彼女の顔が見えなかった。

どこかの誰かが殺されている、巻き込まれて自分まで殺されるのは嫌だ。だから逃げた。そして後で知ることになる、彼女が殺されたこと。自分が見捨てたことを。

水崎は警察に何も言わなかった。言えなかった。自分の犯した罪を。警察は何も言わない水崎を怪しみ、犯人として、刑務所に入れた。

刑務所にいる間は楽だった。自分は罪を償っていると感ずることが出来た。一番、落ち着ける場所だった。

が、そこから追い出されてしまった。自由を与えられた。まだ、罪を償ってないのに、優しくされることが重くのしかかってくるのに……

選べる自由を手に入れた。自由の使い道には死ぬことも含まれている。だったら死んでしまえばいい。

水崎はそう考えた。

## 6話 計画

高橋の代わり、妻の沙希を地獄に連れて行く夜魔田。

「いい加減、起きてくれませんかね」

魂というのは死んだ時に気を失っている場合がある。沙希も気を失っていたので、夜魔田が背負って運んでいる。

「休憩所で起きるのを待ちますか……」

天国と地獄の境目にある休憩所。そこから猶予の道と呼ばれる道を通って、天国または地獄に向かう。

猶予の道とは、魂に死んだことを自覚させ、考える時間を与え、これからのことを覚悟させるためにある。

休憩所に着くと、まず沙希を椅子に座らせて、自分はその隣に座った。沙希は何の反応もなく、当分起きる気配はない。

「飲み物でも飲んでみましょうか」

飲み物はセルフサービスのため自分で取りに行かないといけない。夜魔田は立ち上がると、そこに神内がやってきた。

「あれ、胎児の魂はもう処理したんですか？」

夜魔田の前にきた神内は首を横に振った。

「いや、とりあえず天国に置いてきました。先ほど、天国行きの間が死んだので、先にそれを回収しに行かないといけなくなったので」

「ああ、それで」

「それで、相談なんですけど、あなたが持ってきた魂、少し私に貸してくれませんか？」

神内が貸して欲しいのは沙希の魂。今から回収しに行く魂は、沙希と密接な関係があるので、神内はある計画を立てた。

「貸すって……地獄行きの魂ですよ？」

「ええ、だから。猶予の道を通るその間だけ貸して欲しいんです。少し、思うところがあります」

「……まあ、それなら構いませんけど。胎児のことで迷惑をかけましたし」

「じゃあ、それでは少しここで待っていてください」

そう言うと、神内は急いで回収に向かった。

この時、沙希が気を失っていることを確認した。気を失っているということはまだ、自分が天国に行くか地獄に行くか知らない。これは神内にとって好都合だった。目を覚ます前に計画を進める必要がある。

\*\*\*

……僕はなぜ歩いているのだろうか？

水崎は繁華街を歩いていた。

……飛び降りて死んだはずなのに

自分がすでに死んで、魂の状態で彷徨っていることに気づいていない。

「死んだのですよ、あなたは」

誰かがそう言った。声のした方に振り向くと、神内が立っていた。

「死んだ？ ああ、やっぱり、そうなんだ」

自ら死を選んだだけあって、落ち着いている。

「それで、あなたは？」

「私はあなたを天国に連れて行く天使ですよ」

「天使……天国……」

と言うことは、僕は地獄行きじゃないのか……

水崎は何とも言えなかった。まだ苦しまないと気がすまない、そんな思いがある。

「じゃ、行きましょう」

神内は水崎の手を取ると、宙に浮いた。水崎は一瞬、驚いた表情

を見せたが、抵抗することなく神内に従った。

「どンドン空高く舞い、雲を突き抜けたと思ったら、いつの間にか地面に立っていた。」

「あれ、空に浮いてたはずなのに」

水崎は足元を見ると、確かに地面がある。真黒な地面に、真っ白な空。その二色に支配されていた。

「それじゃついてきてください」

多少、戸惑っている水崎にそう言うと、神内は先を歩いて行った。

「あ、はい」

水崎は返事をして慌ててついてくる。

「少しして休憩所に着くと、夜魔田とまだ気を失っている沙希が待っていた。」

「ん、どうやら間に合いましたか。それでは夜魔田さん、ここからは私に任せていただけますか」

「ええ、いいですよ。それでは、また後で」

夜魔田は軽く手を振ると、この場から立ち去った。

「さて、と、とりあえずは起きるのを待ちますか。ああ、水崎さん、あなた、この方に見覚えがありますか？」

神内は沙希を指差した。

「いえ、知りませんけど」

嘘ではなく、全く見覚えがない。どこかで会ったのかと、過去を思い出すが見当たらない。初対面のはずだった。

「そうですか」

神内は軽く相槌を打った。

「ん、んん」

不意に沙希が声を上げた。

「あ、タイミングよく起きたようですね」

「ゆっくりと目を開く。沙希の視界に真っ白な空が映った。それから、少し視線をずらすと、神内の姿。その横にもう一人。」

沙希は水崎に見覚えがあった。忘れるわけがない。水崎との過去

神内と夜魔田の仕事

は最高に楽しい記憶だった。

7話 正体（前書き）

これより前の部分、07/09/05に若干、手を加えました。

## 7話 正体

「ここはどこ？」

水崎を見て沙希が言った。

「え？」

答えられるわけがなく、水崎は神内に視線を向けた。

「あなたは死んだんです。私は魂を天国に連れて行く天使。こちらの水崎さんを連れて行くついでに、あなたも一緒に連れて行くんです。猶予の道にね」

「死んだ……私が？」

死ぬ直前の記憶が思い出される。自分の夫に刺し殺された記憶。

椅子に座ってうつむいたまま顔を上げない沙希を見て、水崎は掛けるべき言葉が思いつかない。死んだことがシヨックなのだろうと思うと、ただ見守ることしか出来なかった。しかし、沙希がうつむいて顔を上げないのはそれだけが原因ではない。

あの野郎……私を殺しやがった。

唇を噛みしめて体を震わせる。無念で仕方がなかった。あと少しで、遺産を自分の物に出来たのにと思うと。

金、金、私の金が……

地獄行きだけあって、高橋に負けず劣らず、沙希も屈折していた。「歩けますか？ もう少し休憩してから行きましょうか？」

神内が様子を確認をする。沙希は顔を上げると神内に聞いた。

「さっき天使って言ってたけど、私は天国に行けるの？」

沙希は、自分が天国に行けるような人間ではないことは自覚している。生きている時にそれだけのことをしてきた。

「天使は魂を天国に連れて行くのが仕事ですから」

と、神内が答えた。

何の手違いかは知らないが、天国へ行ける。なら悪くないかもしれない。生きている間にある程度のことは楽しんだと思って、後は

天国で悠々と暮らすとするか。

天国と言っても神様に仕えなければいけないので、さほど楽しいものではないが、沙希はそのことは知らない。

「ねえ、私の夫は天国と地獄、どちらへ行くの？」

「もちろん地獄です。あなたを殺したような人ですよ」

神内は淡々と答える。沙希はうつむいた。笑みを浮かべたのがばれないように。

「殺されたって……」

驚いたのは水崎だった。自分の目の前にいる人は殺されてここに来た。自分の彼女と重ねてしまい、胸が苦しくなる。

「あなたはなぜここに？ 見たところまだ若いみたいだけど」

沙希はどうか笑みを鎮めると、水崎に尋ねた。

「え？ 僕は、ええと、その……」

殺された人間を前に、自ら命を絶つたとは言い辛い。

「……自殺だから」

それでも消え入りそうな声でそう言った。

「ごめんなさい、聞かれたくないことだったわね」

沈痛な表情で沙希は謝った。本心では馬鹿にしていたが。

「さて、それではご案内しますので、二人ともついて来てください」

神内は猶予の道に向かって歩き出した。今からある計画を遂行する。上手く行けば、天国に持って行く魂が増えるかもしれない。

\*\*\*

猶予の道。神内は魂の簡単な説明をしながら天国に向かう。

内容は、人間の時と違って魂は自殺出来ないこと。しかし、自殺は出来なくても、他者から手を下されれば魂でも死ぬということ。魂が死ぬことは完全な消滅を意味して、生まれ変わることは二度と出来なくなる。

それでも自殺は出来ないようにしておかないと、地獄行きの魂は

消滅してでも自殺を選んでしまう。

「ああ、それとですね。会いたい相手がいるなら、後で私に言ってください。天国では極力その人のそばで暮らせるように配慮しますから」

地獄にはない天国の優しさ、と思うかもしれないが、好きな人の近くで働かせた方が不満を溜めずに神様に仕えるだろうという目論見があった。

これを聞いて、水崎に希望が湧いた。天国で好きな人と一緒になれると思った。

「あそこですよ」

神内が指差した。二又に道が分かれているのが見える。

「右に行けば天国。左に行けば地獄です」

二又の中央部分では夜魔田が、神内が来るのを待っていた。

「さてと、お返ししてもらってもいいですかね」

と、夜魔田が確認してきた。

「そうですね、では、あなたはこちらへ」

沙希に夜魔田のもとへ行くように促した。

「どうということかしら？」

「だって、あなた地獄行きですから」

微笑みながら地獄行きを告げる神内。

「な？ さっき天国へ連れて行くって言ったじゃない！」

沙希は声を荒げた。

「私はね、天使は魂を天国に連れて行くのが仕事だと言っただけです。天国行きは水崎さんだけ。あなたには猶予の道を一緒に連れて行くと言っただけです。ですので、ここから先は悪魔である夜魔田さんのお仕事になります」

夜魔田が歩み寄ると、沙希は後ろに後ずさった。殺された上に地獄へなんか行きたくない。

「水崎さん、どうして私がこの人とあなたを一緒に連れて来たと思います？」

神内は水崎に質問した。

「え、どうしてって……」

質問の意図が分からないので答えられない。神内は沙希を見た。

「水崎さんはあなたが誰なのか分かってないようです。あなたと水崎さんの関係を教えて差し上げたらどうですか？」

神内が関係を教えるように促した。水崎は、どういふことなのかと、疑問が湧いた。沙希とは今日初めて会ったはずで、生前には会ったことないはずだった。

沙希は夜魔田に警戒しながらも、水崎を見る。ここで沙希は良いことを思いついた。いや、良いことではないが最悪から逃れる一つの家だった。それは神内の計画の一つでもあった。

「そうね、私は生きている時にあなたに会ったことがあるわ」

沙希が水崎に話しかける。しかし、どうしても水崎には思い出せない。

「分からないようね。それもそうよね。あの時、私は顔を隠していたし。あなたはすぐに逃げてしまったし」

顔を隠していた？　すぐに逃げた？　まだ水崎には察しがつかない。

「まだ、分からない？　あなたはそれのせいで刑務所に入ったんじゃないかしら」

「え……まさか……」

思い出す。あの日の夜のことを。彼女を捨てて逃げた時のことを。「そうよ。あなたの彼女は私が殺した。あの時は愉快だったわ。私の身代わりにあなたが警察に捕まったんですもの。笑いながら毎日ニュースを見ていたわ」

「何で……どうして……」

呟くように水崎は尋ねた。

「どうして？　あの女はね、私の夫と依然付き合っていた女だったのよ。それが振られた癖に、よりを戻そうとして、また近づいてきた。夫が画家として成功を収めたものだから、金目的で寄って来た

のよ。冗談じゃないわ。夫の稼いだ金は全て私のものよ。だから、殺してやった」

何と言うことだろう。最愛の彼女を殺した犯人が目の前にいる。水崎は呆然と立ち尽くしている。その様子を見て沙希は満足気に笑っている。もううつむいて隠す必要はない。地獄行きだと知っている。

「あの女はね、あなたがいたのに、他の男に言い寄っていたのよ。馬鹿よね、あなたは。それで牢屋の中にまで入ってたんだから」

他の男に言い寄っていた？ 水崎は両拳を握り締めて震えさせている。

「嘘だ……そんなことあるわけがない」

信じられるわけがない。二人は上手く行っていたんだ。殺される前までは。

水崎は沙希を睨んだ。目には殺意が込められている。しかし、それは沙希にとって思うつぼだった。

さあ、私を殺しに来い。地獄へなど行くものか。魂が自殺できないなら、殺してもらおうまでのこと。沙希の方から先に一步、水崎に向かつて歩みだした。

「うわああああああ！」

水崎が叫んで沙希に突進した。押し倒して首に手を掛ける。

「殺してやる！」  
手に力を込める。

水崎は猶予の道を歩いている間、ずっと沙希を気に掛けていた。助けられることなく殺されたことはどれだけ辛かっただろうかと思いがながら。

それが余計に怒りに拍車を掛けた。絶対に許さない。殺してやる。今の水崎はそれしか考えられない。沙希を殺すまでそんなに時間はかからないと思われた。

しかし、それは神内と夜魔田がいなければの話だった。

「あのねえ。魂同士の争いを私たちが黙って見ているわけではないで

しよ」

神内が言う。二人を引き離すと、夜魔田は沙希をはがいじめにしたまま地獄へ歩き出す。

「止めるお！ 離せえ！ 私は地獄へなんか行きたくない！」

沙希は抵抗するが、下っ端といえども悪魔である夜魔田の力には敵わない。

「ちくしょうおお！」

沙希は叫びながら地獄へと落ちて行く。後には神内と水崎に二人が残された。殺す相手がなくなった水崎は一步も動かずに佇んでいる。

「どうして……こんなことを？ あなたは天使ではなかったんですか？ 僕を苦しめて一体何になるんですか？」

力ない口調で、水崎が神内に問いかけた。

「あなたには色々と知ってもらいたかったんですよ。自分のことをね」

「自分のこと？」

「そうです。水崎さん、あなた天国に行ったらどうします？」

「どうしますって……それは、もちろん彼女に会いたい……」

彼女に会う。この言葉に神内はため息をついた。

「それはあなただけの天国です。良いですか、あなたは自殺したんです。天寿を全うしたわけではない。あなた、彼女に会った時、それをどう説明するんですか？」

そう言われて水崎は気付いた。確かにそうだ。何て言えば良いのか。自殺をして後を追って来たと言われて喜ぶとは思えない。天国で彼女と一緒にいたい、それは自分にとって天国でも、彼女にとっては……

「理解してくれましたか？ あなたを天国に連れて行けば、彼女は苦しむ。そういうことです」

水崎は黙り込んでいる。自分は天国には行けない。

「それに、水崎さんは悪人ではないので、地獄へ行くこともできま

せん」

では、どこに自分の居場所があると言うのか？

「水崎さん、もう一度頑張つて生きてみませんか？ 生まれ変わるのではなくて、水崎さんとしての残りの人生を」

自分は死んだはず、と神内の顔を見た。

「実を言いますと、あなたはまだ完全に死んだわけではないんです。正確には危篤状態です。もし、あなたが望むなら、私はあなたの魂を体に戻します」

水崎は何も答えない。

「家族が、あなたが目を開けるのを待っていますよ。だから頑張つて生きてみませんか」

優しく水崎に話しかける神内。水崎は言葉を発することはなかったが小さく頷いた。

「良く決心してくれました。それでは戻りましょう」

水崎の手を取る神内。今から魂を体に戻しに行く。

後は、水崎が壊れてしまうことを期待するだけ。計画通りに事は進んでいる

\*\*\*

「やあ、どうやらあの人の魂は戻して来たみたいですね」

休憩所にいた神内に夜魔田が話しかけた。

「使えませんから。自殺した魂は。下手に天国に連れて行けば、魂同士の揉めごとの要因になりかねません。好きな人が自殺してここまで来たと言われても、ね。そうになると、怒られるのは連れてきた私になります。体に戻すのが最善なんですよ」

「ま、そうですね。しかし、何で、私から魂を借りたんですか？

知らなくても良い真実を告げて傷つけてしまうだけではないですか？ 人間は脆いですよ」

「脆いからこそ、です」

神内は一言そう返した。しかしこの一言で夜魔田は感づいた。

「ああ、そう言うことですか。神内さん、最初から壊れた人間を作ることが目的だったんですね。壊れた人間は、破壊衝動を持ちますから。あわよくば家族皆殺しにでもしてくれれば、魂をまとめてかせげますしね」

夜魔田の読みは正解だった。神内は水崎を天国には連れて行けないと判断したために、沙希を借りた。全ては水崎の心を砕くために「しかし、まあ、悪魔みたいなことを思いついたものですね」

皮肉交じりに夜魔田が言った。

「たまには、天使もこういうことをしないと、やってられないんですよ」

神内は極めて平静にこう返した

## 8話 病院

病室のベッド。上半身だけ起こして、画を描いている高橋。

思い通りだ、とほくそ笑む。

高橋は妻を殺した後、罪に問われることはなく、病院で悠々自適な生活を送っていた。

当初の目論見通り被害者の一人になった高橋は、心の治療とは名ばかりで病室で毎日画を描いて暮らしていた。

殺人を犯した高橋の画は以前よりも高値で取引されるようになっていた。今の高橋は夜魔田との契約は破棄しているので普通の人間に戻っている。そのため高橋の描く画も価値がない代物になっている。

にもかかわらず、高値で取引されるのは過去の高橋の画家としてのイメージと、殺人を犯してしまうまでに苦しんだ芸術家の創りだすものは深みがあるという、一方的な買い手の勘違いだった。

馬鹿ばかりだと思いつながら、画を描く。どんなに適当に描いても買い手は良い解釈しかしない。

コンコン。

誰かが病室のドアをノックした。

「……どうぞ」

高橋が返事をすると、ドアを開けて入って来たのは夜魔田だった。

「お前？」

高橋は怪訝な表情をした。

今更、何をしにきた？ 沙希の魂はくれてやったのだから、もう用事はないはずだ。もしかして気が変わって俺の魂を……

「そんな顔をしないでください。取って食おうというわけじゃありませんよ。私がここに来たのは、あなたにちょっとプレゼントをと、思いました」

「プレゼントだと？」

「はい、これです」

夜魔田はそう言うと、丸められた一枚の画を差し出してきた。高橋は警戒しながらもそれを受け取る。

「どうぞ、開いて見てください。私もちょっと画を描いてみようと思っ  
てましてね。で、出来たのがこれなんです」

「何で、それを俺に？」

「いいから、いいから。とりあえず見てくださいよ」

高橋はゆっくりと画を開く。

「！」

そこには地獄が描かれていた。正真正銘の地獄絵図。

「どうですか、私の画。どう思いますか？」

夜魔田が感想を求めた。

しかし、高橋はそれに答えることはなく、声を上げて笑った。画の中央に地獄の責め苦を受けている沙希の姿が描かれていたため。

高橋は沙希を憐れむことはなく、良い様だとは思わない。

いずれ自分がここに行くことが決まっているのなら、少しでも長生きして、この世の限りの贅沢を味わってやる。

高橋は夜魔田を無視して病室から出て行くこととした。

「どこへ行くんですか？」

夜魔田が尋ねた。

「ああ、ちよつと院長に聞いてくるだけだ。俺はいつ退院出来るのかってな。さつさとここを出て、思う存分楽しまないといけないからな。何、金を積めば簡単なことだ」

そう言うと、高橋は夜魔田を置いて出て行った。

「とんでもない人ですね」

一人残された夜魔田は呟くと、待機場所に戻って行った。あわよくば、地獄の画を見た高橋が発狂して自殺でもしてくれればと思っ  
たが、そんなに甘くなかった。

病院の廊下、院長室に向かう高橋。そこで一人の若い男とすれ違  
った。

「おい、面白い物を見せてやるよ」

高橋は男を呼び止めると、持っていた地獄の画を見せた。見せようと思った理由は特にない。ただの高橋の気まぐれ。

「ほら、ここだ。こいつは俺の妻だった女だ。今は地獄に落ちてこの様だな」

沙希を指差す高橋。男はそれを見て表情が一変した。

こいつがあの子の夫。僕の彼女が言い寄っていた男……

男は水崎だった。水崎は一命を取りとめた後、心を患って高橋と同じ病院に入院していた。

水崎は高橋を睨んだ。あの女は殺せなかった。なら代わりにお前を殺してやる。水崎は高橋の首に手を掛けた。

「お、おい、お前？」

驚いて振りほどこうとする。が、歯止めを失っている今の水崎の力は尋常ではなかった。

「ぐ、あつ、」

抵抗出来ずに高橋の意識は遠のいて行く。

次に高橋が目を覚ました時は死んで魂になった後、目の前で夜魔田が微笑んでいた。

神内と夜魔田の仕事

9話 天国と地獄（後編）（前書き）

4話 天国と地獄（前編）の続き。

## 9話 天国と地獄（後編）

「あれ、また誰か死んだようなので、私行ってきます」と、夜魔田が言った。

「はいはい、どうぞ」

神内はどうでも良いと言った感じで相槌を打った。

「魂を取りに行っている間、少しだけ高橋さん預かってくれませんか。もう、壊れているので暴れることはないと思いますので」

「はいはい、良いですよ」

「じゃあ、頼みます」

そう言って、夜魔田は回収に向かった。神内はまだぶつぶつ言っている高橋を見て、ため息をついた。

「余計な事をしてしまった」

心を碎かれた水崎は、神内の思い通りに人を殺したが、よりにもよって相手が高橋だった。

高橋が死んでも得をするのは夜魔田で神内に利益はない。

「どうせ殺すのなら、善人を殺してくださいよ」

待機場所、愚痴をこぼしながら神内は席を立つと、夜魔田に飲み干されたコップを持って、水をお代わりをしに行った。戻って来ると、ちよびちよびとコップに口をつけながら夜魔田の帰りを待つ。

しばらくしてから夜魔田が帰って来た。連れて来た魂を見て神内はうなだれた。

「神内さん……ついてないですねえ」

夜魔田が遠慮がちに言った。連れて来られたのは水崎だった。水崎は高橋を殺した後、自分も舌を噛み切って死んだ。もう水崎は人を殺してしまっているので天国には行けない。そのため、回収が夜魔田の仕事になった。

水崎も高橋と同じように何かぶつぶつ言って、目は虚ろだった。「すみませんね。私ばかり得をしているようで」

「気まずい雰囲気を感じて夜魔田が謝ると、神内は首を横に振った。『いいえ、私の要領が悪いだけです。それよりも早く二人を地獄まで連れて行ってあげて下さい。水崎さんにとっては苦痛を与えてくれる地獄は本望でしょう』」

「ああ、そうですね。それでは、また」

二人の手を取って地獄に向かう夜魔田。二人共、手を引つ張られないと一人では歩けない状態だった。

それを見ながら神内はため息をついた。ため息ぐらいしかするこ  
とがない。

## エピソード

恭子は天国で神様に仕えていた。

高橋と付き合い、しかし捨てられて、その後水崎と付き合い始めた彼女は、沙希に殺されて生涯を終えることになった。

若くして死んだ為、天国に会いたい人はいない。会いたい人は、まだ皆、生きています。

天国で彼女は一人だった。神様に仕えている時間以外は、一人でじっとしている。寂しくて悲しかったが、恭子はそれは自業自得だと思っていた。

生前、恭子は水崎と付き合っていたながら、高橋に近づいた。まだ高橋のことが好きだという気持ちを捨てきれないでいた。

が、別に高橋と、よりを戻したかったわけではない。付き合っている時、精神的に不安定なことが多かった高橋が、それを克服出来たのかどうか気がなくなっていたから近づいた。今の高橋が幸せであるならば、よりを戻せなくてもそれで良かった。

しかし、だからと言って水崎に対して後ろめたい気持ちがないわけではない。罪悪感があったから高橋のことは一切話さずにいた。そして、私には罰が下った。

……私は死んだ。

これは当然の罰。付き合っていた人を裏切ったのだから。

今の恭子は、刑務所に入っていた時の水崎と同じ心境だった。一人である。誰もそばにいない。発する言葉も、神様から命令を言い渡された時に言う、はい、分かりました、だけ。

孤独と言う苦痛に彼女はすがっていた。それだけが自分を平静に保てる唯一の物だった。

自分が犯した罪を償っていると思える。

恭子は一人、真っ白な空を見上げた。

神様は助けてくれない。それでも願う。水崎が幸せになっていることを。

神内と夜魔田の仕事

エピソード（後書き）

これで終了です。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4909c/>

---

神内と夜魔田の仕事

2008年11月7日08時11分発行